

論文の内容の要旨

論文提出者氏名	小林 千 夏
論文審査担当者	主 査 池田 修一 副 査 加藤 博之 ・ 中山 淳
論文題目 Increasing Incidence and Age at Onset of Amyotrophic Lateral Sclerosis in the Nagano Prefecture of Japan (長野県における ALS の発症者数の増加と発症年齢の高齢化)	
(論文の内容の要旨) <p>【背景】 筋萎縮性側索硬化症(ALS)は、一次・二次運動ニューロンが進行性に変性する疾患であり、上下肢体幹の筋力低下の進行とともに呼吸筋や嚥下筋の能力が低下し、発症から3～5年で死に至る。症状は重篤であり、栄養管理や気道管理が必須となるため、患者家族の介護負担や必要医療資源も大きく、本疾患が地域医療に与える影響は甚大である。近年、複数の国・地域から本疾患の患者数の増加が散発的に報告されている。今回我々は信州大学医学部附属病院での患者数の推移を検討し、同様の傾向がみられるのか否かについて検討した。また患者数増加に関連する要因についてもあわせて検討した。</p> <p>【対象】 1984年から2014年の約30年間に当院を受診し確定診断されたALS患者連続症例232名の診断時診療録を参照し、現在広く用いられている revised El Escorial 診断基準を満たす199名を対象とした。</p> <p>【方法】 対象30年間を5年間ごと6区間に分け、患者数、発症年齢、性比、病型について推移を検討した。</p> <p>【結果】 199名のうち、115名が男性、84名が女性であった。発症年齢は64.6±12.2歳であった。149名は四肢脱力が初発症状(limb-onset type)であり、残り50名は球麻痺症状が初発症状(bulbar-onset type)であった。</p> <p>1984-89年で18名(男性/女性 6/12名、limb/bulbar 12/6名)、1990-1994年で22名(男性/女性 14/8名、limb/bulbar 17/5名)、1995-1999年で26名(男性/女性 15/11名、limb/bulbar 20/6名)、2000-2004年で19名(男性/女性 9/10名、limb/bulbar 13/6名)、2005-2009年で50名(男性/女性 31/19名、limb/bulbar 40/10名)、2010-2014年で64名(男性/女性 40/24名、limb/bulbar 47/17名)の患者を新規に診断しており、直近10年での新規患者は性別・病型にかかわらず増加を認めたが、特に女性、bulbar-onset typeでの増加が顕著であった。</p> <p>発症年齢は1984-1989年で55.3±8.48歳、1990-1994年で58.8±12.6歳、1995-1999年で62.2±11.1歳、2000-2004年で62.7±12.9歳、2005-2009年で65.3±9.26歳、2010-2014年で66.2±11.0歳であり、徐々に上昇していた。発症年齢が65歳以降である高齢発症ALSの割合は、1984-1989年で17%、1990-1994年で41%、1995-1999年で54%、2000-2004年で58%、2005-2009年で58%、2010-2014年で60%であり、1995年以降は新規ALS患者の半数以上は高齢発症者で占められていた。</p> <p>患者住所を信州大学医学部附属病院が含まれる松本医療圏と、それ以外(北信、長野、佐久、上小、諏訪、上伊那、飯伊、木曾、大北)の二次医療圏に分類したところ、松本医療圏の患者の占める割合は1984-1989年で61%、1990-1994年で36%、1995-1999年で46%、2000-2004年で37%、2005-2009年で46%、2010-2014年で47%であった。直近10年間では松本医療圏の患者比率は変化がないため、本院における患者数の増加は他医療圏からの患者流入が原因ではなく、松本医療圏内での発症者数の増加が示された。</p>	

【考察】 長野県では近年主要医療圏の基幹病院に神経内科医を配置する体制を整えており、ALS の診断は当該病院で完結するようになった。松本医療圏の内でも診断能力をもった病院が整備されてきており、ALS 診断を目的として患者を当院へ紹介する必要性は低下してきていると考えられる。患者住所を検討したが松本医療圏外の患者割合の増加はなく、当地での ALS 患者数は近年明らかに増加していると考えた。また、他医療圏からの患者も同様に増加しており、発症数の増加は松本医療圏を越えた傾向であると考えた。

日本社会は急速に高齢化が進行しており、その傾向は長野県でも同一である。高齢発症 ALS 患者の増加は、発症要因の一つに加齢があることを示唆する。高齢化は今後も進行するため、発症者の増加傾向は今後も継続する可能性がある。本疾患は経過中に多大な介護・医療資源を要求するため、地域医療の中での高齢 ALS に対する専門的体制の構築が求められる。